

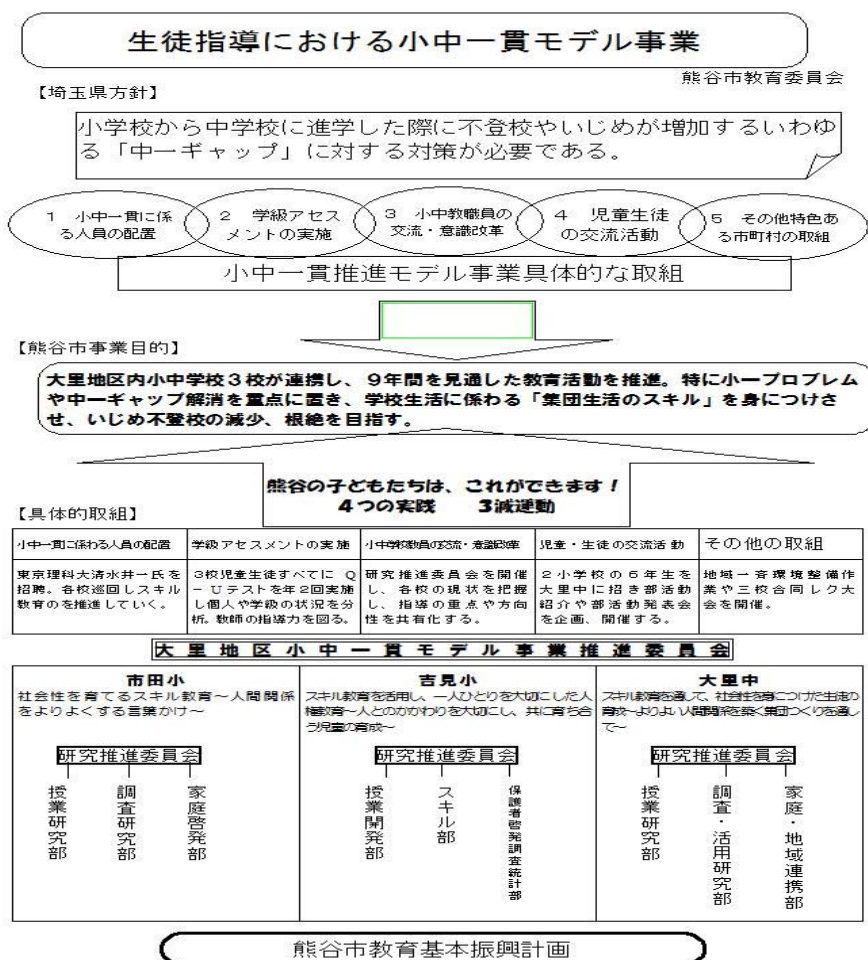
熊谷市教育委員会

1 熊谷市の概要

大里中学校区は、熊谷市の郊外に位置し、純朴な農村地帯であるが、近年新興住宅が建ち並び、新しい住民が増加している。家庭や地域の学校行事への参加も多く、教育に関する関心は比較的高い。大里中学校区には、県立の養護施設はあるが、地域住民の理解も深く、その関係は良好である。定期的に、学校と児童養護施設、教育委員会や児童相談所等でケース会議や情報交換の機会を設け、子どもたちにきめ細やかな指導を図っている。現在この施設から、62名の児童・生徒（平成23年度小学生24名・中学生38名）が通学している。

2 研究の構想

(1) 調査研究の推進組織体制



(2) 研究の内容

大里中学校区小中学校三校（大里中 市田小 吉見小）が連携し、9年間を見通した教育活動を推進していく。特に小1プロブレムや中1ギャップ解消を重点に置き、学校生活に係わる「集団生活のスキル」を身につけさせる。そのために「人間関係づくり」や「基本的な生活習慣」の確立を目指し、いじめや非行問題行動の根絶を目指し、不登校児童生徒を減少させる。

(3) 検証の視点、方法

いじめ、非行問題行動、不登校児童生徒数の昨年度と今年度の比較。

3 研究の取組事例

(1) 小中一貫に係る人員の配置

校長経験者であり、現在、東京理科大学教育課程指導室講師である「清水井一」氏を招聘し、大里三校を巡回し、主に「スキル教育」を推進させていく。

(2) 学級アセスメントの実施

「スキル教育」を浸透させていくために、2つの小学校と1つの中学校すべての児童生徒を対象に、Q-Uテストを年2回実施する。個人や学級の状況を分析し、教師の指導力の向上を図り、教師間の指導の共有化・焦点化を図る。

(3) 小中学校教員の交流・意識改革

- ① 年3回研究推進委員会を開催し、推進委員（各校の推進委員、教育委員会、コーディネーター等）を中心に各校の現状を話し合い、把握し合うことで指導の重点や方向性、さらに努力点を共有化する。
- ② 授業研究会（年3回）を開催し、小1プロブレムや中1ギャップのメカニズムや背景等について研修し、解消に向けた具体的な取組を小中合同で行う。また授業参観を推進し、指導技術や指導方法の向上を図る。
- ③ 各項ともオープンスクールを定期的実施し、教師間の授業参観をはじめ保護者や地域からの学校参観をすすめ、開かれた学校づくりに努める。
- ④ 研究報告書や研究のまとめ（リーフレット）を作成し、研究意識の高揚に努める。

(4) 児童生徒の交流

2つの小学校（市田小 吉見小）の6年生児童を大里中に招き、部活動紹介や部活動発表会を開催し小中合同の部活動を展開する。

4 研究の成果及び今後の課題

(1) 研究の成果

① 小中一貫に係る人員の配置

ア 計画的に「スキル教育」の授業を実施することにより、児童生徒一人一人のコミュニケーション能力を高めると同時に、教員の指導力向上にもつながった。

イ 学習に関する規律をスキル教育で身に付けることにより、教師が児童生徒一人一人に対して適切な指導ができるようになり、児童生徒の学力向上につながってきた。

② 学級アセスメントの実施

Q-U検査等学級アセスメントを実施することにより、学級や学年の分析方法や手だてを学ぶことができた。さらに児童生徒に対する適切な支援を行うことができた。

③ 小中学校教職員の交流・意識改革

(合同研修会・小中相互の授業参観)

小中学校の職員の連携を図ることは、職員同士がお互い理解し合うことにもつながっている。そのことにより、生徒指導上の課題解決などをスムーズに行うことが多くなってきた。また、学習規律や学校のきまりを小中の連携を図り、できることから少しずつ統一し始めたので、児童生徒の社会性が育っている。



④ 児童生徒の交流

ア 小中学校合同地域のごみゼロ運動

小中学生、保護者、地域の方が合同でごみ拾い活動を行った。小学生からは、「中学生のお兄さん、お姉さんがとても頼もしく感じました。」という尊敬する感想が多く聞かれた。中学生からは「中学生が気が付かないところのごみも、小学生が積極的に拾ってくれました。」という感想も聞かれた。中学生と小学生の距離を縮め、中一ギャップ解消のきっかけとなった。

イ 小学校5年生サッカー大会（中学生審判として参加）

吉見小、市田小の5年生が親善サッカー大会を実施した。その際に、大里中学校サッカー部の生徒が、審判として参加。中学生が公正、公平に審判している姿は、小学生にとって憧れの存在になったようである。

ウ 小学校6年生部活動体験

小学生にとって、中学生になって一番楽しみにしている反面、不安でもある部活動。その体験を12月に実施した。各運動部活動に分かれ、中学生が小学生へ優しく技術指導や体験活動をさせていた。小学生は体験後「不安は少しなくなりました。」「先輩のようになりたいです。」「楽しみにってきました。」という感想が多く聞かれた。また小学生の保護者も、大きな安心感を得ていたという。

- ⑤ いじめ、非行問題行動（暴力行為）、不登校児童生徒数の昨年度と今年度の比較（12月末現在での比較）

	大里中			吉見小			市田小		
	いじめ	暴力	不登校	いじめ	暴力	不登校	いじめ	暴力	不登校
平成22年	7	3	6 (698)	0	0	0	4	0	0
平成23年	1	1	2 (174)	0	0	0	0	0	0

※（ ）内の数字は総欠席日数

いじめの認知件数、不登校児童生徒数も昨年度同期に比べ、減少した。不登校にはなっていない不登校傾向の児童生徒がいるのだが、小中学校の連携を図り、一貫した学校生活に係わる「集団生活のスキル」を身に付けさせ、児童生徒が安心して混乱することなく学校生活を送ることができたと考える。

（2）今後の課題

- ① 卒業を目の前にした小学校6年生の中学校へ進学について、保護者は大きな不安を児童同様抱えている。よって、中学校進学に向けての不安を解消する保護者に対しての取組を計画的に実施していく。児童生徒の中1ギャップ、小1プロブレム等、様々な課題に対し解決していくために保護者との連携が大変重要である。懇談会の際に、保護者対象の「スキル教育」等を行い、さらに保護者、地域へ啓発を図り、大里三校が連携し小中一貫した社会性を育てる取組を実施していく。
- ② 中1ギャップ解消のためには、小中の滑らかな接続が必要になる。小中学校の生活面、学習面のきまりが大きく食い違うことなく、一貫性を持って指導にあたっていくことが課題となっている。

